「きらみずき」栽培こよみ（化学肥料や殺虫・殺菌剤を使用しない栽培）

令和８年度栽培者用 Ver 1

令和８年１月　レーク滋賀農業協同組合

＜施肥＞

- **化学肥料(窒素成分)を使用しない**
- 下表の基準量を目安に施用
- 地力の低いほ場での栽培は減収リスクが高いので避ける
- 側条施肥の場合、６月下旬頃に**葉色が淡くなり始めたら葉色 3.8 以下になるまでに（　）内の量を目安に追肥**
- 穂肥は**幼穂形成期（幼穂長 1mm）の１週間前(７月上中旬)および、１回目の２週間後**を目安に２回施用

施肥法	地帯区分	基肥	追肥	穂肥Ⅰ	穂肥Ⅱ
		滋賀こだわり元肥855		ハイグレード有機11号	
全層	湖辺粘質 高地力田	25kg	25kg	28kg	28kg
	湖辺砂質 平坦、中山間	38kg	25kg	28kg	28kg
側条	湖辺粘質 高地力田	38kg	(13kg)	28kg	28kg
	湖辺砂質 平坦、中山間	50kg	(13kg)	28kg	28kg
大豆跡		0~25kg	0~25kg	28kg	28kg

※10a 当たりの施用量
※有機 JAS 栽培には使用できません。

＜育苗・移植＞

- 温湯消毒は 60～62℃で 10 分間
- 温湯消毒後の種子は直ちに浸種するか、十分に風乾して低温低湿度で保管する
- ５月 10 日から 20 日を中心に移植
- 栽植密度は下表の基準を参考とする

湖辺	湖辺砂質、平坦	中山間
50～60株/坪	60株/坪	60～70株/坪

＜水管理＞

- 代かき前にあぜ塗りや畦畔補修で漏水対策
- 除草剤処理後はやや深水で７日間の止水管理を遵守
- 目標穂数の８割の茎数（茎数の推移を参考）で溝切り・中干しを実施
- 出穂前後各３週間は常時湛水管理
- 品質低下防止のため刈取予定日の５日前までは間断かんがいを実施

＜病害虫対策＞

- **殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)を使用しない**（ただし、有機 JAS 規格で使用が認められている農薬は使用可能）
- 過去にいもち病やウンカ類などの病害虫が多発生した地域・ほ場での栽培は避ける
- いもち病の発生源となる余剰苗は速やかに除去する
- 斑点米カメムシ類の対策は、畦畔の２回連続草刈りと色彩選別機を利用して行う
- イネ縞葉枯病などのまん延を防ぐため、収穫後早期に耕うんを実施する

＜収穫、乾燥・調製＞

- 籾黄化率 85～90%が刈取適期
- 乾燥時の仕上げ水分は 14.5%
- 1.85 ㎜以上の網目で選別

環境こだわり農産物
農薬・化学肥料 通常の5割以下
びわ湖にやさしい
滋賀県認証

○特性概要（参考）

項目	きらみずき	日本晴
出穂期	**8月9日**	8月8日
成熟期	**9月16日**	9月14日
稈長	**74cm**	83cm
穂数（/㎡）	**381本**	382本
精玄米重(/10a)	**604kg**	567kg
同上比率	**(107)**	100

H28～R5 年の平均値(5/10 移植・農技センター内)
＊緩効性肥料によるデータ。

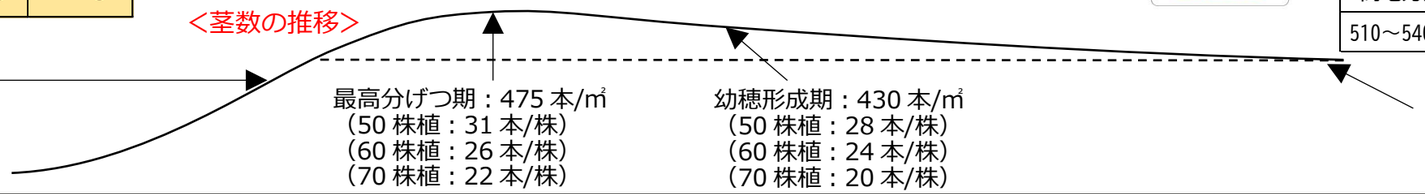
○収量構成要素の目安（510 kg/10a の場合）

項目	目安	項目	目安
穂　数	380本/㎡	登熟歩合	76%
一穂籾数	78粒	玄米千粒重	22.7g
㎡当籾数	29,600粒		

○収量（/10a）（粒厚 1.85 ㎜以上）・品質の目標

地帯			大豆跡	整粒歩合
湖辺粘質、高地力田	湖辺砂質、平坦	中山間		
510～540kg	480～510kg	480kg	510～540kg	80%以上

＜茎数の推移＞



月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月～
生育期区分	育苗期	移植期	活着期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期	穂ばらみ期	出穂期	登熟期	成熟期
水管理	浅水代かき・自然減水	やや深水 / 浅水	浅水管理	中干し	間断かんがい	★常時湛水管理（出穂前後各３週間）	間断かんがい			
栽培管理のポイント（★は要注意事項）	・丁寧な代かきにより漏水を防止 ・あぜ塗りや畦畔補修を実施 【扁水防止対策】	・温度管理の徹底で徒長と葉焼けを防止 ・うす播き、均播を励行 ・温湯消毒後はすぐ浸種するか、風乾後低温低湿で保管 ・温湯消毒は６０～６２℃で１０分間実施 【健苗の育成】	・除草剤処理後はやや深水で止水管理７日間を徹底 ・除草剤処理時は漏水対策を徹底 ★**基肥は基準量を目安に施用** ★**基準の栽培密度で移植** ★**５月１０日から２０日を中心に移植** 【移植・施肥】	★**溝切り・中干しは目標穂数の８割の茎数で実施** 【溝切り・中干し】	★**基肥が側条施肥の場合は葉色が低下したら施用** ★**窒素成分２kg／１０a を基準** 【追肥施用】	・ヒエ等が目立つ場合に中期剤を処理 【雑草管理】	★**幼穂形成期１週間前とその２週間後の２回施用** ★**窒素成分６kg／１０a を基準に分施** 【穂肥施用】	★**出穂２～３週間前と出穂期の２回草刈りを徹底** 【カメムシ防除のための畦畔２回連続草刈り】	★**刈取予定日の５日前まで間断かんがいを実施** 【登熟後半の水管理】	・刈り遅れると胴割れや茶米が増加するので注意 ★**籾黄化率８５%～９０%が刈取適期** 【適期収穫】	・適正な乾燥速度で胴割粒と過乾燥米を防止 ・乾燥時の仕上げ水分は１４．５% 【乾燥調製】	★**色彩選別機を活用し斑点米を除去** ★**１．８５㎜以上の網目で選別** 【乾燥調製】
												・稲わら腐熟促進および病害虫発生抑制のため、稲わらすき込みに加えて、牛ふん堆肥等の有機物施用 ・土づくり肥料を施用 【土づくりの徹底】
	★**病害虫の常発地域を避けて栽培** 【栽培に適したほ場の選定】											秋耕を早期実施